

## 第3回 ドイツ語作文・翻訳コンテスト

### 独文和訳 課題

"Ganz besonders wollen wir, dass forthin in unseren Städten und Märkten und auf dem Lande zu keinem Bier mehr Stücke als allein Gersten, Hopfen und Wasser verwendet und gebraucht werden sollen." So lautet die Formulierung, die als Bayerisches Reinheitsgebot Karriere gemacht hat und mittlerweile - zum "Deutschen Reinheitsgebot" mutiert - als weltweit anerkanntes Qualitätssiegel gilt. Der Passus war Teil einer Landordnung, die von den bayerischen Herzögen Wilhelm IV. und Ludwig X. am 23. April 1516 in Ingolstadt erlassen worden war, um die Verwaltung der einstigen bayerischen Teilherzogtümer zu harmonisieren.

Damals war Bier tatsächlich ein "Grundnahrungsmittel". Die hygienischen Zustände spotteten jeder Beschreibung, Trinkwasser war von Krankheitserregern durchsetzt. Beim Brauvorgang musste es allerdings abgekocht werden. Hinzu kommt: Hopfen wirkt antibakteriell - das damalige Bier war mit seinem im Vergleich zu heute wesentlich niedrigerem Alkoholgehalt ein verhältnismäßig "gesundes" Getränk. Selbstverständlich wurde es auch von Frauen und sogar Kindern konsumiert, den ganzen Tag. Einerseits sorgten sich die Väter des ältesten bestehenden Lebensmittelgesetzes der Welt also um die Gesundheit ihrer Untertanen. Bis zur Verordnung waren Stechapfel, Bilsenkraut, Schlafmohn oder Ruß oder gar Holzspäne beliebte Zutaten beim Bierbrauen. 「...」 「Die Verordnung」 war der Beginn einer immer noch erfolgreichen Marketingstrategie: Nach dem Reinheitsgebot gebrautes Bier genießt bis heute ein wichtiges Alleinstellungsmerkmal gegenüber der Konkurrenz.

Quelle: <http://www.dw.com/de/bier-500-jahre-reinheitsgebot/a-19190386>

### 最優秀賞 中園蘭様

「我が国の市街、村落、および市場において、今後一切、大麦、ホップ、水以外の原料をビールに使用してはならないこととする」。こう書かれた公文書は、バイエルン純粋令として地位を築き、現在では「ドイツ純粋令」へ変貌した一世界的に有名な品質保証の印として認知されている。その一節は、バイエルン公ヴィルヘルム四世とルートヴィヒ十世が、かつてのバイエルン公領における行政の調和を目的として1516年4月23日にインゴルシュタットで公布した法律の一部であった。

当時、ビールは事実上の「基本食」であった。当時の衛生状況は筆舌に尽くしがたく、飲

用水は病原菌に汚染されていた。醸造の過程では、むしろ水は煮沸されねばならない。さらに、ホップは抗菌効果を持つ。かつてのビールはすなわち、今日と比べてはるかにアルコール含有量が低かったこともあり、割合「健康的な」飲み物だった。それで自然と女性や、子どもにまでも一日を通して消費されていた。一方では、現存する世界最古の食品衛生法の生みの親は、国民の健康をも気にかけていた。法令が出されるまで、ビールの醸造にはチョウセンアサガオやヒヨス（ナス科の薬用植物）、ケシ、ないし煤やおが屑までもがよく添加されていたのだ。

[...]その「法令」はいまだ有効なマーケティング戦略のはしりであった。この戦略により、純粋令の発布以降に醸造されたビールは今日に至るまで、競合者にとって無視できない、独自の売りを享受しているのである。

### 講評

ビール醸造に大麦・ホップ・水以外の原料の使用を禁じた、ドイツのビール純粋令は有名ですが、発効から今年でちょうど500周年になります。その由来を説明する興味深い記事が今回の課題となりました。とはいえ、歴史用語に加えてジャーナリズム特有の言い回しもあるので、かなりの難題だったと思われます。受賞作はそれらを正しく読解し、読みやすい日本語に訳していた点が高く評価されました。明らかな誤訳は一箇所だけ。「発布以降に醸造されたビール」という訳文はnachを「～の後」と解釈した結果ですが、ここでは「～に従って」という意味で用いられています。「ビール純粋令に従って醸造されたビール」が正しい訳となります。また、あえて難を言えば、全体的に日本語をいじりすぎたような印象がなきにしもあらずです。例えば最後の段落の「競合者にとって無視できない、独自の売り」は普通に「競合製品に対する重要なセールス・ポイント」と訳した方がすっきりして分かりやすかったです。 「日本語として自然な文章となるように」という要求を意識した結果かもしれませんが、ときにはシンプルな訳に帰ってみるのも良いかもしれません。